

# 2013年度リプロダクティブ・ヘルスおよび公衆衛生に関する スイス・英国研修報告

西原 三佳<sup>1</sup>・大西真由美<sup>2</sup>

保健学研究 27 : 55-59, 2015

**Key Words** : 国際看護学実習, リプロダクティブ・ヘルス, 英国, スイス

(2014年7月31日受付)  
(2014年9月18日受理)

## I. はじめに

従来から実施してきた海外研修を、2009年度入学生より学生の希望により単位履修可能な選択科目として開講している<sup>1,2,3</sup>。研修目的は「諸外国における人々の健康問題の特徴とその解決のための方策を学習する」としており、2013年度はスイスおよび英国にて研修を実施した。

## II. 事前準備

### 1) 学生募集

新学期オリエンテーション(2013年4月)において、研修に関し説明を行い、その時点で数名の参加希望があった。2013年10月に、あらためて参加希望者を募ったところ、最終的に看護学専攻3年生5名が研修参加を希望し、全員が編入学生であった。また修士課程助産師養成コースより2名の参加希望があり、最終的に、学生7名および引率教員2名、合計9名での研修実施となった。

### 2) 研修内容および渡航に関する調整

2014年2月27日～3月8日の8泊10日(機中1泊)の日程で、スイスおよび英国における研修内容を調整した。具体的研修内容に関しては、2009年度および2010年度にロンドン及びリーズにて実施した英国研修内容および2012年度に実施したスイスにおける研修内容を基に、現地引率者らと調整をした。2013年度は、ロンドンの「児童虐待防止協会」におけるレクチャーおよびジュネーブの「グローバル・ファンド」におけるレクチャーの2つを新たに研修内容として加えた。

旅行社には、航空券、送迎にかかる専用車手配(空港または一部訪問先から宿泊先への送迎)、英国内列車移動(ロンドンからリーズ)、宿泊、リーズにおける専用車の手配を依頼した。看護学専攻学生1名は海外渡航経験が無かったため、パスポート取得について助言を行った。

### 3) 事前オリエンテーション

研修参加者に対し、2013年12月より事前学習を行なった。事前配布資料として、スイスおよび英国における保健医療制度、看護教育、助産教育、ならびに主に疫学的視点と看護教育を中心としたナイチンゲールの功績とジョン・スノウの功績に関する資料を基に、テーマ別に学生による自己学習と発表を行い、学習内容を共有した(表1)。

2014年2月5日に研修に関する事前オリエンテーションを実施した。事務的内容として、研修参加にあたり学生本人と保護者宛の研修説明書と参加「承諾書」を配布し、「承諾書」に学生本人と保護者の署名・捺印の上、2014年2月24日までに提出することとした。参加学生は、事前に保健学科学務係で海外渡航申請手続きを行うよう指導した。また、最終的な研修スケジュール確認および研修後に提出する課題レポートについて説明を行った。さらに危機管理として、長崎大学「海外渡航危機管理マニュアル」ならびに「保健学科が企画・実施する海外実習・研修等における事故・不測事態への対応」を基に、海外渡航に関する注意事項および事故等の不測事態への対応について十分に説明を行った。「承諾書」には研修参加にあたり海外旅行保険に加入することを前提とする旨を記載し、学生は各自で任意の海外旅行保険に加入した上で、加入済みであることを証明する書類のコピーを提出してもらった。また、入学時に加入を勧奨している学生総合共済保険ならびに学生賠償責任保険への加入状況についても確認した。

研修参加費用は、参加者の自己負担とした。研修参加費用に含まれるものは、旅行社へ手配依頼した内容(航空券・宿泊等)に加え、日本国内の移動、英国滞在中の朝食以外の食事、現地交通費(地下鉄、バス、タクシー)、博物館の入館料等をそれぞれ参加者の自己負担とした。旅行社手配に関する経費については、一旦学生が旅行社に対して支払うが、帰国後、証憑の提出により

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻

2 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科地域リハビリテーション学分野

表 1. 国際保健学演習における主な配布資料

<p>【スイス：保健医療、看護助産教育】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) Kunz 今井玲子. スイスの看護教育とリハビリテーション. リハビリテーション看護研究 7 リハビリテーション看護と家族支援. 医歯薬出版株式会社. 100-107, 2003.</li> <li>2) いづみルビエール. スイスの助産師教育制度と助産師の働き方. 助産雑誌 67 (1) : 58-63, 2003.</li> </ol> <p>【英国：保健医療、英国看護教育、助産教育、出産ケア】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 白瀬由美香. イギリスにおける地域保健サービスの形成. 大原社会問題研究書雑誌. 586・587 : 34-46, 2007.</li> <li>2) 近藤克則. 社会的共通資本としての看護の役割と責務－基調講演 Well-being (幸福・健康) と社会的共通資本. 日本医療・病院管理学会誌 : 95-105, 2011.</li> <li>3) 安部彩. 子どもの健康格差の要因. 医療と社会 22 (3) : 255-269, 2013.</li> <li>4) 曾根志穂, 他. イギリスにおける看護師の教育制度の変遷と看護職の現状. 石川看護雑誌 3 (1) : 95-101, 2003.</li> <li>5) 成瀬和子, 石川陽子. 英国における外国人看護師の受入れ制度と教育. Journal of International Health 28 (1) : 13-20, 2013.</li> <li>6) 水野仁子, 安藤広子. 英国の助産師教育基準から見た日本の助産師教育に関する一考察. 岩手県立大学看護学部紀要 14 : 61-71, 2012.</li> <li>7) 小沢淳子. 英国における助産師のガイドライン. 助産師 62 (1) : 72-75, 2008.</li> <li>8) 海野信也. 外国における分娩事情. 周産期医学 38 (3) : 285-289, 2008.</li> </ol> <p>【ナイチンゲールおよびジョン・スノウ】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 徳永哲. 19世紀中頃のリバプールとナイチンゲール. 日本赤十字九州国際看護大学 IRR 台 8号 : 31-41, 2010.</li> <li>2) 薄井坦子. ナイチンゲール看護論の継承と発展－ヘンダーソンから M. ニューマンまで. 日本看護歴史学会誌 22号, 23-35, 2009.</li> </ol>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

「長崎大学海外実習等経費」によって補てんされ、2013年度の学生一人当たりの自己負担額は約9万円であった。また、現地調整・通訳謝金も「長崎大学海外実習等経費」によって支出していただいた。なお2014年度からこれらの経費配分は変更されている。

### III. 研修の実際

主に今回初めて訪問した場所を中心に報告する。

#### 1) 全体行程 (表 2)

現地講義担当者の都合や現地状況により、急遽研修スケジュールを変更せざるを得ない日があった。それに伴い自由行動は、研修時間外および3月1日(日)午後から3日(月)正午までとした。

#### 2) スイス

##### 1. 国際赤十字・赤新月社ミュージアム見学

同博物館は、改装のため2011年6月より閉館していたが2013年3月に再開された。人道問題を抱える当事者から直接語られているような対面式映像など多様な工夫が施されている展示により、様々な視点から人道問題を理解し、考え、人道支援活動に関して学べる内容となっていた。

##### 2. グローバル・ファンドにて講義

グローバル・ファンドは、2000年G8九州沖縄サミットを機に2002年1月に発足した資金供与機関である。三大感染症といわれるエイズ、結核、マラリアへの対策資金を各国政府、民間財団、企業など国際社会から大規模に調達し、開発途上国が自ら行う三大感染症の予防、治療、感染者支援事業へ、資金を提供している<sup>4)</sup>。今回、戦略投資効果局長を務める國井修医師より、なぜ三大感染症が途上国で問題となっているのか、グローバル・ファンドの概要、これまでの対策資金提供実績および効

果、戦略と今後の課題について、講義を受けた。

#### 3) 英国

##### 1. Portland Hospital 見学

2008年に設立された、現在では英国で唯一の女性と子どものための私立病院である。産科、婦人科、小児科の病棟と外来を有し、小児科では英国最大の病床数を有する。本研修では産科病棟を主に見学した。年間約2,000件の分娩があり、母親のニーズに合わせ様々なケアおよび分娩スタイルを提供している。サービスには多種多様な内容と料金設定があり、個々のニーズに合わせた患者中心のケア提供をしている。妊娠7週目からの基本的産前ケアプランがあり、エコーや血液検査などのヘルスチェックに加え、担当医師との面談、出産スタイルの選択、妊婦教室などNHSでは含まれていない様々なケアを包括的に有料で提供している。また主にイスラム教患者など特別な配慮が必要な患者へのケアや通訳など、多様なサービス提供体制が整っている。

##### 2. 児童虐待防止協会訪問 : National Society for the Prevention of Cruelty to Children: NSPCC

児童虐待防止協会は、1884年に設立された虐待防止と脆弱な家族への支援を行っている団体である<sup>5)</sup>。設立当初は動物虐待に関する活動を行っていた団体であったが、児童虐待防止のために貢献したいという設立者の意志により、本協会が設立された。以来、130年以上にわたり支援活動を展開している。現在スタッフは約2,000人、運営資金は全て寄付で賄われており、毎年約1億ポンド(約170億円)の寄付が集まるという。

事務所を訪問し、スタッフよりNSPCCについてレクチャーを受け、その後、質疑応答の時間をとった。NSPCCの子どもおよび家族のための支援業務は主に、①家族支援、②調査、③キャンペーンに分けられる。

表 2. 2013年度研修プログラム

日時	研修施設・場所	研修内容
2月27日(木)		移動(長崎→福岡国際空港→ソウル→アムステルダム→ジュネーブ)
2月28日(金) 午前	WHO	WHO 本部内見学, 「グローバルヘルスの動向」 WHO 日本人職員「世界の労働安全」 ILO 日本人職員より, それぞれ講義を受け, 世界的動向や取組みを学ぶ
	午後 国連ヨーロッパ本部前広場 国際赤十字・赤新月社ミュージアム グローバルファンド	国連本部前広場見学, 赤新月社ミュージアムを見学し, 人道支援活動の歴史と現状および課題について学ぶ 「世界の HIV/AIDS 対策の動向」について講義を受け, HIV/AIDS への世界的取組みについて学ぶ
3月1日(土) 午前	ジュネーブ周辺文化視察	
3月2日(日)		自由行動
3月3日(月)		移動(ジュネーブ→ロンドン)
3月4日(火) 午前	国立図書館(エキシビジョン)	ナイチンゲールおよびジョン・スノウによる記録(オリジナル)を見学し, 疫学および公衆衛生学への貢献について学ぶ
	ロンドン・スクール Hygiene and Tropical Medicine	ロンドン・スクールの歴史, 教育, 研究, 図書館資料・史料等について学ぶ, リプロダクティブヘルス調査研究に関するディスカッション
	午後 ジョン・スノウの井戸	ジョン・スノウの井戸を訪ねジョン・スノウの公衆衛生学への貢献について学ぶ
	Portland Hospital (私立病院)	National Health Service (NHS) における産科サービスとの違いを学ぶ
3月5日(水) 午前		NHS に関する講義
	児童虐待協会 (NSPCC)	「乳幼児虐待予防への取組み」について説明を受け, NSPCC の役割および虐待防止対策について学ぶ
	午後 ナイチンゲール博物館	ナイチンゲールの功績と看護の発展について学ぶ
3月6日(金) 午前	St. Mary's Hospital (NHS)	英国における出産ケア, リプロダクティブヘルスケアについて, NHS の観点から学び, プライベート病院との違いを知る
3月7日(土) 午前		移動(ロンドン→リーズ)
	サックレイ医療博物館	英国における公衆衛生, 保健医療の発展の歴史を学ぶ
	午後	移動(リーズ→アムステルダム(機中泊)→ソウル)
3月8日(日)	日本帰国	移動(ソウル→福岡) 福岡国際空港にて現地解散

①家族支援：DVD配布，ハイリスク家庭への支援，マンディング・ベビー・プログラム，ハイリスク母子へのアプローチ，の4つの支援を行っている。DVD配布は，全ての妊婦に対するポピュレーション・アプローチの一つである。英国のNHSにより出産時期に必ずヘルスピジターまたは助産師が訪問するが，その機会を利用し「子育てに関するDVD」を配布している。DVDは12ヶ国語あり，移民が多い英国において様々な言語的背景をもつ母親に対応できるよう工夫がなされている。この活動により母親のストレスが軽減されたとのエビデンスが示されているとのことであった。ハイリスク家族に対する支援では，若い母親や障がいをもつ親などを対象とし，出産後9週間にわたり集中的に支援を行う。母乳の与え方などの子育て方法と，乳児期から子どもを「個人」として捉えられるよう，子どもへの接し方を工夫・提案している。さらに，母親自身のセルフケアの大切さなど母親への支援も併せて行っている。3つ目は，「マインディング・ベビー」というアメリカで開発されたプログラムによる継続支援である。助産師やソーシャルワーカーが，子どもが2歳になるまで個別訪問を行い，母子の絆を深められるよう支援を行っている。4つ目は，ハイリスク母子に対するアプローチである。薬物やアルコールなど依存症がある母親，他の社会的支援を受けている母親などが対象となる。それらの母子に対し，家族全体への関わりも含め包括的に支援を行い，子どもが20週になるま

でじっくりと関わりながら，どのようなケアやサービスが必要とされるかエコロジカルモデルを使用し，アセスメントする。ケースによっては，母子を離し子どもを施設保護する，あるいは里子へ出すといった判断が下されるケースもあるとのことであった。

②調査：上記4つの支援活動について調査を行い，虐待防止へのエビデンスを構築している。また調査においては，大学等と学術的連携も行っている。

③キャンペーン：虐待ケースや母親の精神状態等，調査を通じて得られたエビデンスを基にレポートを作成し，アドボカシー活動を行っている。またコミュニティにおけるキャンペーン活動により，協会や活動に関する周知と，寄付を募っている。

その他，チャイルドホットラインを設置しており，子どもが自ら虐待に関する悩みなどを匿名で相談できるようにしている。このサービスは有名なサービスであり，協会としても重要なサービスの一つである。本協会は，自治体や政府からの寄付は一切受けず完全に独立した立場として活動しているが，NHSとの連携は行われている。具体的には，先に述べたDVD配布のほか，NHSソーシャルワーカーとの協働，助産師への研修，会議等での情報提供などを通じた連携である。さらに，虐待に関する裁判において，母子分離をするかどうかといった重要な判断に関し発言権が与えられている。このように，本協会は社会的に重要な役割を担っている団体である。

ディスカッションでは、活動における課題についても紹介された。例えば、キャンペーンは大事な活動であるが、一方で虐待に関する団体というイメージが強すぎることで母親が相談しにくくなるといったジレンマもあるとのことであった。また、里親については、一時期の養育期間後、更生した本来の親元へ帰る子どもは半数、残りの半数はそのまま里親の元で育つという現状がある。里親希望者は多く、個別に適正をみながら決定するが、子どもの年齢が高いまたはアフリカ系の子どもなどは、養育者が見つからず施設で生活を送るケースがある、など支援活動を行っている中でのジレンマや課題について話を聞くことが出来た。

#### IV. 今後の課題

2013年度の研修日程は、2011年度同様に10日間という、比較的長い行程での研修であった。スケジュール変更により自由時間が増えたことで、学生はヨーロッパ文化に触れる時間が増え、さらに自分たちの力だけで慣れない交通機関を利用し、言葉の壁がある中でコミュニケーションをとるなどの異文化体験の機会となった。実習前半は消極的であった学生が、後半には英語で話す努力をするなど積極的になる姿がみられていた。研修については、「(訪問施設など)もう少しゆっくりと見たかった」、「ホスピスにも行ってみたいかった」といった声も聞かれていたが、全体的に満足度は高かった。特に「事前学習をした時には医療制度の話などがぼんやりしていたけれど、実際に現地に来てみて、学習したことが理解できた」という声が多く、事前学習によって得た知識と研修を通じた体験が学生の中で繋がり、日本とは異なる保健医療システムの実際と、人々の健康課題について理解する機会となった。

運営面では、ジュネーブ空港からホテルへの移動時にタクシー3台に分乗した際、1台だけ違うホテルに到着してしまったというアクシデントはあったものの、事前に連絡体制を確認していたことで電話にて連絡を取ることができ、無事に合流することができた。それ以外は、前述したように自由時間には学生が自分たちだけで行動する機会も設けていたが、トラブルなく研修を終えることが出来た。研修計画は様々な安全面を熟慮した上で立案されたものであり、さらに事前に安全対策に関するブリーフィングを行い、オリエンテーション時にも想定されるトラブルとその対処法について説明を行っていた。

それらの準備を行っていたことで、学生側も適度な緊張感を持って行動することが出来たものと考ええる。

学生は普段、日本の保健医療システムについて意識することはほとんど無いのが現状であろう。日本では、基本的に国民は健康保険を有し、自由に保健医療サービスを受けることができるが、諸外国においては必ずしも保健医療サービスを自由かつ平等に受ける権利が保障されている訳ではない。本研修において、他国の保健医療制度とその実際を知ることで日本の保健医療制度との違いを理解すること、そして保健医療システムと人々の健康問題との関係、それらを取り巻く社会的要因について考えていくことは、保健医療従事者として視野を広げるきっかけとなる。グローバル社会の現在、日本の保健医療現場において、外国人や外国の影響を強く受けている日本人など、異なる文化的・宗教的背景を持つ人々を対象とする機会は増えている。日本の保健医療システムあるいは健康概念のみに基づいた価値観や世界観で、対象者とその背景、さらに社会・文化を理解するのは困難となる場合も生じる。本研修等の機会を通して、国内外を問わず、様々な角度・観点から保健医療課題や健康課題を理解・分析し、対応できる人材を育成することは重要である。今後も、これまでの研修実績を踏まえながらプログラム内容等を引き続き充実させていくことが期待される。

#### 文献

- 1) 大西真由美, 中尾理恵子, 川崎涼子, 大石和代: 平成21年度英国リプロダクティブ・ヘルスならびに地域保健研修報告. 保健学研究22 (2): 71-77, 2010.
- 2) 大西真由美, 大石和代: 2010年度リプロダクティブ・ヘルスおよび公衆衛生に関する英国研修報告. 保健学研究23 (2): 45-49, 2011.
- 3) 荒木美幸, 川崎涼子, 新田章子, 大西真由美: リプロダクティブヘルスならびに地域保健に関するヨーロッパ研修報告 (国際看護学実習Ⅱ). 保健学研究26: 23-30, 2014.
- 4) 世界基金支援日本委員会. 世界基金設立経緯. [http://www.jcie.or.jp/fgfj/03.html#03\\_01](http://www.jcie.or.jp/fgfj/03.html#03_01) (参照2014-7)
- 5) National Society for the Prevention of Cruelty to Children: NSPCC. About the NSPCC. [http://www.nspcc.org.uk/what-we-do/about-the-nspcc/about-the-NSPCC\\_wdh71771.html](http://www.nspcc.org.uk/what-we-do/about-the-nspcc/about-the-NSPCC_wdh71771.html) (参照2014-7)

# Report of the reproductive health and public health study tour in Switzerland and UK

Mika NISHIHARA<sup>1</sup>, Mayumi OHNISHI<sup>2</sup>

1 Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences, Unit of Nursing

2 Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences, Department of Community-based  
Rehabilitation Sciences

Received 31 July 2014

Accepted 18 September 2014